

「星空と路-上映室-『暮らしの行き先』」アフタートーク 林剛平×上原啓五

開催日時：2018年2月24日 10:00-11:40

話し手：林剛平（歓藍社）、上原啓五（ランドスケープアーキテクト）

進行：田中千秋（せんだいメディアテーク）

田中：はい。まずはじめに2つの映像を見ていただきましたけれども、これからトークを始めたいと思います。わたくし、せんだいメディアテークで、3がつ11にちをわすれないためにセンターを担当しているスタッフの田中千秋と申します。今日は進行と聞き手ということで、すこし混ぜさせていただきたいと思ってます。

はじめに二人のゲストの方を紹介させていただきます。まず、お一人目、最初に上映した『さぐば』の記録映像を撮りました林剛平さんです。林さんは、最初の紹介にもあったんですけど、大学の研究者として普段いろんなことをされているんですけど、環境放射能調査など、そういったものもやっているんですが、昨年度わすれン！のほうに参加してもらって、本当に、多岐にわたる活動をしているんですが、まあ今回はその一つであるさぐばの舟づくりということを紹介させていただいております。特に、調査っていうところからこぼれ落ちる、なんでしょうね、もっとそういう、統計とかデータでは残らない何かということを残したいということで、いろんなことをしてくださっております。

次に、もう一人のゲストなんですけれども、上原啓五さんで、特に『さぐば』の舞台である閑上にあります貞山運河という場所が、みなさんご存知だと思いますけれども、そこで貞山運河研究所というところに所属していろんな活動をしているとともに、ご自身はランドスケープアーキテクトということで、お庭づくりとか、どういった環境をどう活かしていくか、みたいなことをお仕事としてもされております。

今日は、このトークの時間ちょっとありますので、いろんなお話を聞いていきたいなあとと思うんですけども、まずはじめに、『さぐば』の映像のあと、ペルーの『カバリト』の映像を流して、一体どういうこれは趣旨なんだ？みたいなのが、きっとみなさんもあると思いますので、簡単に紹介させていただきます。

まず、『さぐば』の記録自体は、震災後の地域文化の復活とか、そういった継承ということの中で生まれてきたものが一つ当然あると思って、本当に人間の手には負えない原子力、そういった事故の中で、手仕事とか、人間が生きるためにどういう文化があったのかなってというようなことのための記録になっているんだなあとというふうに我々もっておりますし、今日2つ見ていただいたペルーの『カバリト』のほうは1962年に撮影されたもので、今から56年ぐらい前なんですね。そうしたときに、もしかしてこの林剛平さんが記録され

た映像が、56年後ですね、もしかしたら同じような地域映像アーカイブとして残っていくものになるんじゃないか、みたいな。そういった、今回の「暮らしの行き先」っていうような副題も上映会全体に付いていますけども、そういうことを考える上でも、何か一つ、こう昔から積み重なってきた、残っていた舟のほかの映像と見ることによって、何か見えるものがあるんじゃないかなっていうふうにちょっと思って、こういう2本立てですね、上映しました。

そして、またECの説明をちょっと改めてしますと、EC、エンサイクロペディア・シネマトグラフィカという映像アーカイブ、まあドイツ発祥でして、日本の活用チームというのがあるんですけども、そのみなさんにちょっとあの、昨年も『さぐば』というのを上映して、そのときはロングバージョン、今DVDになって、2階とかで貸し出すことをしてるんですけども、この映像を流しました。そのときに、ECの日本活用チームのみなさんも興味を持っていただいて、舟の映像もECにはいっぱいあるよ、ということを知って、なんかこれは本当に、何か共通するものがあるんじゃないか、というような経緯もありまして、ご協力いただきまして、舟の映像を今回お借りして、上映したというような経緯がありません。

それで、今回のトーク、お話進めていく中のキーワードとしてなっていくんじゃないかなーみたいなのが、いま地域の暮らしの、地域を記録するということはどういうことか、また、技術が継承されていくってどういうことか、あとそこから見える生活っていうのはどういうものがあるのか、みたいなことがあるんじゃないかなと思います。

それで、ペルーの『カバリト』という映像を見ていただきましたが、さぐばは木材で、ペルーのカバリトはアシ舟ってということなんですけれども、本当に手の動かし方とかっていうのは何か共通するようなものもあるし、アシっていうのは今、仙台の沿岸部とかに生えるものもあるし、本当にすごい原初的な技術を使ってつくっていたもので、日本の『古事記』とかにも登場するみたいな話もあるみたいなので、そういった、継承されていくっていうのはどういうことなのかな、みたいなこともあるし、最後驚かれたと思うんですけど、カバリト、後ろの穴は乗らないのかよ！みたいなことをみんな思った人がいると思うんですけども（笑）、造形的ユニークさみたいなのも、ちょっと触れたらおもしろいかなあというふうに思っています。本当に、ちょっと実験的なんですけど、今日、お二人とともにいろいろお話ししていきたいなあと思っています。ちょっと前振りが長くなりましたけど、せっかくお二人いますのでね、まずはともあれ、さぐばを記録することになった経緯っていうのをちょっと、お二人に聞いてみたいなあと思います。まずは剛平さんにお聞きするといいですかね。

林：僕は震災のあとにこっちに来て、放射能の調査なんかで東北大学にいたんですけど、東北大学の研究室でまあ全然友達ができなくて、なんかこれは、せっかく仙台にいるのにもうすこしこういう地元の人との知り合いが増えていって、なんかなるといいなと思って、アンデパンダン（せんだい 21 アンデパンダン展）っていう仙台が毎年もう、僕が来てから毎年やっているアンデパンダンに出したらそこで、上原さんにお会いしたのが、まあ貞山運河は、名前は知ってたんだけど、実際にそこを今どうされてるかっていうのは上原さんに会ったのがきっかけですね。

田中：さぐばというのは、舟のことはいつ知ったんですか？

林：それは、まずいろんな方、閉上の地区に上原さんのお知り合いいっぱいいたから、民話をやってる人とか歌をやってる人とかいろんな人に話を聞いていく中で、「さぐば」っていうのがよく登場するもので、まあこれで川を渡ってたり、妊婦さんがこうちょっと、急な、容態が変化したときなんかは、市内に妊婦さんを運んだりするのにもさぐばを使ってその当時は車よりも早かったりして、そういうセーフティネットにもなるようなライフラインだったんだなあっていうのと、あと、さぐばっていう名前の語源はもう本当いっぱいあるんですけど、ひとりの人が言っていたのは、作業場所だって言って。作業場所がなまって「さぐば」って言って。で、大学でそのレポートとか書いたりする機会はあったけど、で、貞山運河研究所でもシンポジウムとかもやってたんですけど、僕関わるんだったらもうなんかすごい小さい場所でもいいから一つつくりたいなあっていうのがこの『さぐば』と重なって始まったんですね。

田中：上原さんは剛平さんとの出会いと言いますか、そういうことをどう？

上原：そうですね。いま林さんが言ったように、出会いはそういうところで、それで、貞山運河研究所では、いろんな部会がありまして、その中の一つで「聞き取り調査部会」っていうのがあって、私の知り合いの、特別養護老人ホームをやってる先生からですね、まあお年寄りが多いもんですから、「誰かそういう昔のお話をできる人いませんか？」って聞いたたら、その中の一人にハシウラさんって方で、元舟大工さんがいらっしゃったんですね。じゃあその人のお話を聞こうっていうことで、二人で聞きにいきました。そしたら、この、今日持ってきたんですけど、模型をですね、見せていただいたんですね。昔はですね、この舟を、今おっしゃったように、今の軽トラック代わりに使ってたそうです。だから、いっぱいあったんですけども、震災で、もうほぼなくなっちゃったと。それ

で、ハシウラさんに、これ、実物をぜひつくりたいということで、お願いしたんですけど、まあ十何年もね、つくってないと。それから、道具も皆流されて、それから、釘の入手もなかなか、この舟釘のね。そういういろんな、何回も交渉したんですけど、結局できないってことで、諦めようと思ったんですけど、そしたらたまたま川島先生って東北大の、前にリアス・アーク美術館、気仙沼にいた、館長さんやってた人なんですけど、その先生からですね、「いや、俺知ってるから」って言われて出会ったのが、さっきの岩石棟梁だったんですね。で、頼み込んで、材料はどうすればいいとか、釘はどうすればいいとかまあ、いろいろなことを段取りしまして、それで、ようやくつくってもらったんですね。そんなとこですかね。ええ。

田中：映像を記録するっていうのは最初から、剛平さんの中ではあったんですかね、ちなみに

林：えっと、まあでも、これは7月だったし、僕、3月にわすれん！に入ってから飯館村の記録（『5年後の飯館村調査』）を撮って、小国の（『小国春熊猟 2016』）を撮ってたので、当然の流れでさぐばが始まってからは、うん、ビデオカメラ持ってくることはしました。でも、さぐばをつくる話っていうのはもっと2月とか、わすれん！入る前からあって、今の話が始まる前の前は、本当にもっと、つくりたいなあって思うだけで、それがつくれるに至るまでは、誰に話せばいいかもわかんなかったから、聞き取りの中で出てきた景色を歌にしたんですよ。で、その歌を上原さんに聞いてもらったり、何かっちゃ歌ってたら、なんか、だんだん（笑）。あ、なので、その歌を歌います。

広浦に浮かぶ さぐばと人よ

青いウナギに 白い魚

貞山堀と仙台は在り

木挽き堀から始まった

おーい見えるか

閑上に薫る風よ

閑上に情の海よ

河港に寄せる さぐばと人よ

蜆にアサリに 鴨の群れ

さぐばは舟に 舟にだけにあらず

さぐばは私の 作業場よ
おーい聞こえるか
閑上に光る風よ
閑上に情の海よ

堀辺に生まれる さぐばと人よ
ほほに降る雪 陽の光
漁師を浮かべる さぐばに大工
大工を支える 山師に鍛冶屋
おーい いるか
閑上に鳴る風よ
閑上に情の海よ

田中：めっちゃ剛平さん歌うまいですね（笑）。すごいですね。え、これは、あれですか、歌って、閑上を練り歩いて歌ってたんですか？ どういう（笑）

林：会う人、会う人の前で歌う（笑）

田中：（笑）まず、じゃあ、二人が出会って、こういうのがあるんだと知って、

林：10月に会って、次の2月にはだいぶつくる感じになってましたね。

上原：今の歌は、たぶんね、焼肉かなんか食べて、ちょっとビール飲んで、帰りずっと歩いてうちまで来る途中ね、聞かされたんですよ。よく覚えてるなと思ってね。即興でこういう歌をつくるんだよね。そういう才能もあるのかも、もしかしたら（笑）。

林：いやこれは歌詞書きました（笑）

田中：上原さんは最初に剛平さんと出会ったとき、すごい（剛平さんが）いろいろ関心を持ってくれたじゃないですか。でも、もともとはあんまり閑上とかも知らない、外から来た人だったじゃないですか。最初、そういう人がこういうふうに関心を持ってくれるっていうことに対しては、上原さんとは、なんか「若い人が」とか、そういうのはあったんですか？

上原：波長が合ったのはね、たぶん二人ともね、遊ぶのが好きだってことだと思う。私の仕事もね、庭をつくる仕事なんですけど、まあほとんど遊び、遊んでるような状態でやってるもんですから、だからそこらへんで波長が合って、でも、できてみるとすごいものですね。

それで、明日たまたまですね、1階のロビーに現物を持って来ますので、「いま、貞山運河を考える会」っていうのを（イベント名は「いま、貞山運河を考える」）、今から何年前だろう、平成25年ですから、6、7年前に、考えるテーブルっていうので、そこで、なんか8回ぐらいやったことがあるんですね。その中で、みなさんからいろんな、貞山運河に対する夢とかですね、希望とかそれから、暮らし、それから昔はどうしたかとか、そういったもの話を聞いてたもんですから、だからまあ、舟つくるって「ああ～、なかなかおもしろいな」と思ってね。ちょっと私にはそういう発想なかったんですけど、林君から言われて、じゃあなんとか実現したいなと思ってできたんですね、これは。

田中：すごいですね。この模型はあれですよ、映像中に出てきた、もう何回も出てきた、これをもとに、この、これをなんか測ってましたよね。これ……

上原：ほぼ同じに出来てます

田中：ほぼ同じ

上原：私も図面を描いたんですけど、図面はまったく役に立たなかった。っていうのはね、原寸でやらないとだめなんですね。このカーブとかですね。で、見るとわかるけど、ほとんど手仕事でね、やるんですから、私ああいう技術をやっぱり残さないともずいと思ってるんですよ。だから、いい機会だなと思って。

で、そのあとね、2艘注文あって、まあ今、一つはね、石巻のお医者さんの庭の中にあります。それからもう1艘はですね、秋保の天守閣公園ってあるんですけど、そこの池の中にありますので、まあぜひ、見る機会あったら見てください。

田中：今のその、図面を引いたけど役に立たなかったっていうのは、やはり、カーブとかってことなんですか？ 技術みたいなのが。

林：いや、あとたぶん、情報がちょっと落ちちゃうんだと思います。ものすごい図面を引

くのがうまい人じゃなかったら、この三次曲面の取り合いとかを、描けないんじゃないかな。僕も図面起こそうと思ったけど、むちゃくちゃ難しかった。

田中：技術のことでないですけど、ちょっと EC のことも、ちょろちょろ触れていきたいんですけど、きっと、EC のほうはすごいもうやっぱり手仕事で技術の継承みたいなこともあったと思うんですけど、率直にお二人に、二つの舟づくりの映像を見てみて、なんかやっぱり当然違うなあっていうところ、まあ、ものの形からしても全然違うんですけど、でもやっぱりここはなんかあるんじゃないか、みたいなのが、感想でもいいので。

林：まず住まいのそばでつくれるっていうのがとってもいいなと。さくばのほうでも、本当に、どの浦ごとにも違う舟の形があったっていうのを聞いて、だから岩石棟梁なんかは、自分の仕事が終わったあとに、夜、となりの港に寸法採りに行って、自分の技を磨くみたいなのがあって、たぶんきっとカバリトも、二人はたぶんすごいまい人なんだろうけど、いろんなやり方があるそうだなあと思いました。

田中：舟ごとに、まあ形が違うっても言いますもんね。さくばって、閑上ではさくばだけど、他の場所だと、どこにでもあるものなんですか？さくばって。

上原：呼び方があるみたいですね。だから「ざっぱ」とかね。

で、私、一度、岩石棟梁、まあお昼になったんで、棟梁に「一緒にごはんでも食べに行きませんか？」って言ったら、「俺、忙しくて行けねえんだ」って言うわけね。で、「お昼どうするんですか？」って言ったら、「店番しなきゃだめだ」って言うわけ。で、いっぱいコンビニとかできたけども、棟梁のところまでちっちゃなお店をやってるんですね。それで、牛乳とか豆腐とかそういう日用品売ってるんですけど、やっぱり近所で、コンビニまで行けない人がいて。だからその人たちはまあ来るんで、「空けられないんだ」って言うわけ。しかもですね、舟づくりじゃないときは、昆布漁をやってんだそうですよ。だから、え？

林：ホヤも。

上原：ホヤもやってんの？ほれでその舟を見せられたんですけど、それも自分でつくるんだそうです。だからやろうと思えばね、いろんなことができて、年取ってもあのぐらい働ければ、いいなあ羨ましいなあと思いましたけどね。

林：この舟づくりの場所のすぐ前には水田もあって、あんだけ三陸の先っぽのほうで水が出る場所はとても珍しくて、だから本当に海に面した水田が一枚だけあって、そこで米づくりもされていて、で、その水がまだ井戸だったから上げれたから、震災のときには多くの人の、水の供給もできたし、風呂も沸かせたって言ってましたね。

田中：そういうような、本当に生活に身近にあって、そういう環境っていうのが、まあ棟梁も、沿岸部近いんですけど、そういうことを、いろんなことをして生活しているということですね。カバリトは、最後水に乗ってやりましたが、きっとあれ、漁に出て後ろに魚とか入れんのかなあと勝手に想像してたんですけど、もしかしたらそうなのかもしれないし、棟梁も自分の舟に乗って海に出て、それで漁みたいなのをするっていうような話、いま初めて聞きました。上原さんは、ペルーのカバリトの映像も見てみて、何かちょっと率直に感想みたいなのとあってありますか？

上原：なんかね、うーんと、汚い T シャツとシミだらけの綿パンを穿いてね、すごいかっこよく見えるよね、ああいうのがね。だから、まあ造園の仕事もそうなんですけど、やっぱり職人さんがどどんいなくなっている時代で、こういう技術ってね、やっぱりまあすごい技術だと思うんですよ。それで、実はですね、私、このつくったあとに、竹中大工館（竹中大工道具館）って神戸にあるんですけど、そこでやっぱり和船の、それも三陸の磯舟っていう題でね、まあいろんな展示があって、その冊子いただいたんですけど、それはね、アメリカの人だったかな、アメリカ人が4年間、気仙沼（正しくは岩手県陸前高田市）の村上造船かなんか、弟子入りして、つくって、しかもそういうちゃんと記録をね、冊子にして残したのをもらったんですよ。ほれで、いや、我々がそんなことできないでね、外国の人がやってるって、それもびっくりしたけど、今私やってる庭のね、東屋をつくるんですけど、それまあ、けっこう凝った東屋で、それもね、ウィリアム君ってね、やっぱりフランスから来て、加藤工匠さんってね、山形の宮大工さんところに弟子入りして、それで今、彼がそれをつくってくれたんですけどね、もう、本当にうまい。棟梁と同じぐらいに、ぴったりきれいな東屋ができました。

だからやっぱりそういうものを、日本人がですね、あまり粗末にしすぎてるんじゃないかと思って、今回いい機会なんで皆さんに、ぜひ実物も見てもらいたいと。明日12時から展示しますので、よろしく。そのあと、ちょっと川島先生の基調講演やって、あとはミーティングっていうか、5、6人で、まあいろんな、閑上の人とか、石巻の人とか、あと塩釜の人、それからメディアテークの甲斐さんも参加してもらいますので、よかったらまたいらしてください。

林：来月にもまたさくば来ます。1 階に。(3 月) 7~11 日に来てるので。あと、上原さんがやられてる貞山運河研究所ではさくばに乗るっていうイベントもやってるので、夏になったらそんな機会もあると思います。

田中：まだもうちょっとまあ、二人とも時間があるので、宣伝最後にしようと思ってたんですけど(笑)、了解です。もうちょっと時間があるので、あと 10 分くらいあるので(笑)。なんか、あのですね、さっきの外国の人が関心を持って話にちょっと戻っちゃうんですけど、それこそ東北とか、震災後にそういったものを記録しようとかいう方ってまあ神楽とか撮ってる人とかは、思えばいるような気がするんですけど、そういう生活に根ざした舟の文化、実際、さくばが使われてたのも、震災前、直近まで使われてたというよりは、もうちょっと、ひと世代前ですよ。

上原：ハシウラさんに聞いたんですけど、さくばはね、おそらく今から 15 年ぐらい前からもう誰もつくらなくなった。で、全部 FRP で、あの、プラスチックでつくったんだそうです。で、仕事がなくなって、ハシウラさんもね、ヤマハのボートの仕事をやったんだそうです。ところがですね、ボートをつくって、最後あれをグラインダーかけるんだんですけどね、そうするとその粉が皮膚に付くとかゆくてしょうがないと。で、「あんまり体によくないから辞めたんだ」って言うわけね。それから、あと、この手漕ぎの舟は、まあ漁師さんに聞いたんですけど、魚もね、やっぱり相当利口なんで、油臭い匂いとかですね、それから船外機の音とか、ああいうのでやっぱりみんな逃げちゃうんだそうですよ。だから、手漕ぎでこう行って魚を獲ったり、それからシジミなんかもね、名取川にこう、潮の満ちたときに舟を停めて、鋤簾(じょれん)っていうのをに入れておくと、自然ともう、シジミがその鋤簾に上がってくるっていうかね。で、今赤貝がメインでやってるらしいんだけど、あれは耕運機みたいなので全部獲っちゃうんだそうですよ。そうするとね、やっぱり自然の赤貝がだんだんなくなって、結局養殖みたいに捲くようになるわけですよ。

だから、伝統的な技術とか知恵とかですね、そういうものをやっぱりもうちょっと大事にしないと、まあせつかくあるんですからね、そういうもの。だから今小学校なんかにはそういう話をして。で、柊江小学校では実際これ、校長先生が乗ってみたいと言われたわけね。ほんで、与兵衛沼に浮かべようかなと思って相談したら、やっぱり後援会さんのほうでそれはだめだと。それで、まあプールだったらいいんじゃないかということで、プールに浮かべようと思って運んだんですけど、たまたまね、その日大雪で、凍っちゃってね(笑)、浮かべられなかった。だからもうちょっとあったかいときにやろうってことにしてますけ

どね。

田中：ありがとうございます(笑)。でも15年ぐらい前から使われてなかったってことは、ああでも一応覚えてる人、地域の人たちはいっぱいいて、やはり剛平さんの歌とかで、なんか思い出す人とか、ああ、昔こんなだったよ、みたいな、こういう生活があったんだよ、みたいなことはやっぱ、話してくれる人がいっぱいいたんですか？

林：というより、話を聞いているとさぐばの話が出てくるんですよね。やっぱり海の側で、しかも、広浦っていう穏やかな内海があって、で、多分これ底が浅いのは、堀の中を走りやすいついていうのもあるんですよね。ナローボートと一緒にじゃないですか。なんかそんなこともあって、うん。

田中：たとえばどういうふうなさぐばの話題が出てくるんですか？

林：うんと、いや、さっき話したようなこと。普段使いで使ってて、だから自転車積んで、隣の、学校の行き帰りのときにも乗せてもらうことあったし、あとこれで野菜運んでくる人いたり、薪を運んできたりもしたしっていう。

田中：おもに木曳堀で利用してたってことですかね。閑上のあっちの海側でも使える舟だったんですかね。

上原：そうですね。もともとは、まあ私もあんまり歴史は詳しくないんですけど、阿武隈川からですね、材木を運んで、それを広瀬川まで持って行って、今の大工町の辺りで材を、だから大工さんがあそこらへんにいっぱいいたらしいんですね。で、それで青葉城とかあいうものをつくったんじゃないかって聞きましたけどね。

林：あとなんか、聞き取りの会みたいなきで話をしているのと、やっぱこういう、たとえば岩石棟梁から聞き取りするの、たぶん難しいんですけど、こうやってつくっているそばにいたりやっぱポロンポロンと話が出てきて、棟梁の工場(こうば)も流されて、海辺にあって、で、摺合せ鋸(すりあわせのこ)っていうのこぎりも、「つくれる職人さんがいないんだ」みたいな話になって、自分のその埋もれた工場の中から見つけたのこぎりを使ってこの舟もつくってましたね。

田中：なるほど。そういうやっぱり技術とか道具とかっていうのも、専門的なのがあって最初におっしゃってましたもんね。

あの、個人的な感想なんですけれど、両方の『さぐば』とペルーの『カバリト』の映像を見て、ペルーの『カバリト』って、サイレントだったと思うんですけど、まあ EC の映像はああいうサイレントのものが多くて、それに対して『さぐば』のほうは音が入っていて、まあ今回ショートバージョンだったんですけども、本当に、木を削る音であったり、道具を使うときの音とか、そういったものがすごい、サイレントのあとに見たからっていうこともあるかもしれないですけどすごい印象に残ったんですよ、個人的には。特に、一応ロングバージョンには実は入ってるんですけど、舟釘っていう専用の釘があって、それを打つときの音とか、まあ本当にかっこいいんですけど、そういうのとの違いもあるし、でも実際『カバリト』のときも、きっと葦を切ってる音とか、海の音とか、そういうのが近くにあるんだろなああっていうようなときに、その土地の生活感の雰囲気と言いますか、そういったものがちょっと、表れるかなあっていうのが、個人的には思ったんですけども、なんか、そういう土地の、今こういう、さぐばの映像を残したことによって、まあちょっとそのときの世相じゃないですけど、そのときの雰囲気みたいなのは、きっと後世に残っていくんだろなああっていうような気持ちもするんですね。そうしたときにどう、こういうのを伝えていこうっていうかまた継承していこうっていうか、何か、思いますか？

林：まあ海辺で今、嵩上げして街がだんだんできていくっていうときに、やっぱりまず、生きるための場所が必要だからっていうので、当然住居であったり仕事のことっていうのは最優先に来るんだけど、なんか、それだけじゃないもので生活っていうのはできていて、たとえば機能だけだったら FRP の舟でも、もしかしたらさぐばでも同じなんだけど、そこの若干の違いだったり、それこそつくる過程での作業時のつくり手への負担？ だから、自分の父さんが自分たちの舟をつくってるんだってっていうようなことに、思いを馳せる時間っていうのが必要なとは思いますが。

田中：上原さんも何か。

上原：まあ船だけじゃなくてですね、この木はですね、現物の木は岩出山から約 100 年ぐらいの杉を持ってきたんですね。で、そのときに思ったのは、やっぱりそういう生業がずっと昔はあってね、山を持ってればその木を売ったり、それからあと、まあ畑は自給自足程度でもよくて、そういうちゃんと林業っていう仕事があってね。で、いろいろ、まあ生活してたわけですよね。でも今はもう、外材にとてもかなわないんで。こういう木材は、

林業がもう成り立たないんですね。けども、東北の景観を考えるとですね、やっぱり、「世界で美しい森」とかって雑誌（書籍『世界で一番美しい森への旅』）見たことあるんですけど、私はやっぱり東北の山が世界で一番美しいなと思ってるんですね。だから、そういったものをなんとか活用してですね、それが生活に繋がるような社会をもう一回こう、なんか来るような気がしてね。今みんな IT とか AI とかね、そういう方向に行ってますけども、実は、こういったものをつくったりとかですね、自分の食べ物を自分でつくるとか。そういう生活のほうがはるかに豊かで楽しいんじゃないかなと思ってます。で、庭づくりなんかもそんな、まあ一つの遊びですけども、そういう要素を持っているわけですね。だから、庭の手入れが楽しいようなね、今みんな庭の手入れにお金かかって大変だからってみんな切って、それで駐車場になってるんですけど。だからもう一回そういう時代が来るような気がしてます。

林：生業の話ですけど、この生業のものをやっぱり自分で運べるっていう距離感のものがネットワークになっていくのがとてもいいなあとと思って、大型の物流に任せるんじゃなくて、自分でつくったものを届けれる距離の人としっかり付き合っていくっていう。

田中：なんというか。まあ改めて、なんでしょう、地域の文化性じゃないですけど、自分たちの手の届く範囲の生活の営みみたいところを、ちょっと気づくような機会になったのかなっていうのを、そういうまさに映像なのかなっていう気もしますね。本当に、図らずともペルーの『カバリト』はすごい原初的な映像であったんですけど、ペルーも沿岸部で地震とか津波とかっていうのも、2007年ぐらいにはそういう話にもなったし、それで閑上もそういった場所で、嵩上げ工事がすごい進んでいるってところで、改めて、自分たちの生活、自分のところにあった文化を、失われた風景を見直すっていうようなきっかけがまた訪れる、そんな感じになるといいなあみたいなことは僕も思っております。ちょっと、あれですけど、せっかくなので、じゃあ会場からもし何か、なんでもいいんですけども、率直に感想でも、お二人に質問でもいいので、何かありましたら質疑を受け付けたいと思うんですけども、何かある方はいらっしゃいますでしょうか。

会場1：さきほど上原さんのほうから、材木をさぐばで運んでいたというようなお話がありました。で、閑上から、昔は、おもにおばあちゃんだったと思うんですけど、浜に上がった魚なんかを、行商して仙台までいらっしゃってたっていう話はよく聞きます。それで、いま行商なさってる方は山形から仙山線に乗ってやってきて、北仙台あたりで降りてリヤカーを引いてる方っていうのがいるというお話を聞いたことがあります。今、震災前で

もね、閑上のほうからいらっしゃってる方っていうのはあんまり見かけなかったんです。それで、当時は車もなかったわけですし、おそらく鉄道で、名取駅とか、そういう近いところの駅までは、なんとかお魚を持ってかなきゃいけなかったと思うんですね。で、汽車に乗って仙台まで着いて、それで近くに置かせてもらってるリヤカーなんか積んだりして、それこそ仙台市内のお台所に直結するような人と人との繋がりを持っていたというような話を聞いたことがあります。

で、そういう、なんて言うんですかね、人の技術とかがやっぱり生活に密着してて、そして、かなり深いところまで入っていき、そして、やっぱり人と人との、今、スーパーとかなんかでは対面販売みたいな本当に少なくなりましたし、個人で店をやっている方もやっぱりお話ししながら、なんて言うんですかね、生活が成り立つってというような、商売も含めて、そういう繋がりが本当に少なくなったなあと思うんですね。で、それが本当に、おうちを訪ねていくようにして成り立っていたってことの素晴らしさっていうか。そういうのをこの映像でも感じる事ができて、またお二方のお話でも感じる事ができてとてもよかったと思います。ありがとうございました。

上原：今のお話はね、たぶん五十集（いさば）の女っていうかね。要は、この舟を使って、日辺のあたりに渡し船があったんだそうですよ。で、それ（魚）を背負って、自分のお得意さんに魚を届けるんです、売りに行くんですけど、その人たちすごいと思うのは、ほとんどもう「あそこのお客さんはここの魚が好きだ」とかね、全部コンピューターみたいに頭に入っていて、だから持って行ったのはほとんど売りつくしてくるんだそうです。で、やっぱりそういう、私も近所にね、酒屋さんがあって、いつもビールをケースで買うと、そこのおばさんは、「あれ、上原さんともうビールないんじゃないの？」っていうとね、本当に1本ぐらしか残ってないんですよ。だからそういう生活ってすごくいいなあと思ってね。まあその酒屋のおばさんも亡くなったんですけどね。で、どんどんなくなっていくんですよ、そういうことがね。まあ。

田中：はい。ありがとうございます。本当にそういう密な文化っていうのがなくなっているなっていうのもありますけど、まあでも震災の影響もやっぱり大きいですよ。やっぱりちょっと残っていたんですよ、きっとね、震災前は。あの辺でもね。

上原：100艘ぐらいあった。

田中：え、100艘ですか？（笑）

上原：全部なくなってしまった。

田中：なるほど。それぞれやっぱり個人で持っていたって最初ありましたけど、みんな車のように持っていたみたいなの。

上原：軽トラック代わりに。

田中：軽トラック代わりに持っていたということです。はい。ほかには何か、どういう質問でもいいんですけど。何か、ある方いらっしゃいますでしょうか。

会場2：映像ありがとうございました。舟づくりの技術継承ってところで、林君はその映像を現場のほうに撮りに行ったりして、で、上原さんのほうでは、そういうシンポジウムであったり実物展示とかをされて、知見を広めてたりはしているかと拝見しているんですが、具体的な舟づくりであったり、舟づくりの技術ってものを今後どのように展開できるかというような展望はあったりしたらぜひ教えていただきたいなと。

林：僕は農学部のエシキョクにいたから、橋をつくる時とかにも木殺しとか摺合せってのは聞いたことがあって、だから、たぶん桶なんかでもやってんじゃないかなあと思うんだけど、たぶん水に関わる木の納め方ってのは住居よりもきつと、もう一段精度が高い技術で、だけど、そういう技術のところまでいってる幅を持って、もう一度住居を考えるってということにもできるだろうし、あとやっぱり、釘や錨鑿（つばのみ）っていうキンコンコンコンって抜け出るあの道具なんかは、つくってる場所がすごい少ないけど今でもまだつくってるから、舟にしか今使ってないあの技術をもうすこし別な使い方ができれば、少なくとも道具ってというのが、まず一番最初に道具づくりの人からいなくなって、次にその道具を使う職人さんがいなくなるって言うけど、やっぱり職人さんの技術を習いに行く人も必要だし、あとやっぱ道具っていうものをもう少し考えることで継承の広がりができるかなあ僕は思ってます。

上原：私はですね、この舟を、もうちょっと10人ぐらい乗れるようなものにしてですね、やっぱり貞山運河を周航させるっていうか、そういう、まあ、せっかくあれだけお金かけてね、運河を修復したんだから、やっぱり活用したほうがいいと思うんですね。だから、できればそういう和船でもって貞山運河を周航できれば、まあ観光資源にもなるんじゃない

いかなと思います。で、FRP の舟とはね、やっぱり形は似てるけども、味がまったく違うんでね。この舟だとなんか展示するだけでみんな珍しそうに見てくれるんで、さらにこの舟が実際に乗れるとなるとですね、やっぱり結構インパクトがあるんじゃないかなと思ってますんで、ぜひ、もうすこし大きめなのをなんとかつくりたいなとは思ってますけど。

林：インパクトがなんで必要かなーって僕が思うのは、ともすると仙台の人ですらなかなか海辺に行く機会って少ないし、貞山運河、まあ貞山堀、石垣のいい掘だったのが、行く人が少なければたぶんどんどんコンクリートで埋められて今いってて、まあそれはそれでいいのかもしれないけど、景観っていうものとか、あと、コンクリートで固められてたけど津波が引いたあとにまた昔の石垣が出てきたりもして、本当の意味でのそういうものへの強さっていう知恵がきっとあそこにはあるんじゃないかなと思っているから、まあ建築と土木っていうのが今分かれてるけど、たぶんその辺を横断するような手仕事のかたまりがあつた海辺にあるんじゃないかなと思うので、行く機会を、もうすこしあるといいなと思います。

田中：はい。ありがとうございます。手仕事のかたまりっていう言葉がありましたけど、本当に仙台の中に、こっちの街なかにいると沿岸部、行く機会なかなかないし、閑上とか久しぶりに行くと、復旧、復興工事があつという間に進んでいて、ちょっと驚くことも多いんですけども、何かそこで失われていたけれど、その地域にあった豊かなものっていうのは、今、本当に考えられる機会でも、でも今、震災以降 7 年が経ちまして、ちょっとその辺をいろいろ、さらにそういった記憶さえ風化しているようなときに、またこういう記録があるっていうのは考えるきっかけになるような気がしています。はい。もうお一人か二人ぐらい、お時間的に質問受け付けられるんですけども。どなたか、いらっしゃいますでしょうか。

会場 3：すみません。そういう手仕事でつくったものつながりみたいなものはすごくおもしろいなと思って、私も古くからある技術とかに興味があるんですけど、そういうものをそのまま、昔のまま残すことってやっぱり、人の暮らしとかも変わってきてるので、それをそのまま残すだけじゃ継承していけないと思うときに、さっきも観光というか、10 人ぐらい乗れる大きなものに、とか、いろいろ案があるようなことを伺ったんですけど、そういうものを継承してすこし変わっていく部分があるときに、ここはでも、ここを変えたらそれは、たとえばさくばだったらさくばではなくなってしまうとか、何か、継承していくためにそこは変えられない、けれどもここはこう変えていけるみたいなっていうものが何

かあるのかなっていうのを、ちょっと、考えがあったら伺いたいなと思いました。

林：まずその技術が生まれた背景ってというのが変わってきてるから、今、続かなくなっていこうとしているのかなって僕は思っていて、最初に技術が生まれた背景ってというのは、たぶん人がものすごいたんですよ。で、岩石棟梁なんか最初、職人見習いのときのひと月の給料が石鯰一個だったって言って。それでもやれるような、なんていうか食べ物が家に帰ったらあるしっていう、何人もの人間がわーっと働いてる状況が技術をつくって、一人になった技術を、たとえば、まあ別なところでお金を稼いでいる人が何年か弟子入りして継承したとしても、できあがるものっていうものが、見た目が一緒だったとしても、背景にあるものすごいたくさんの人間の数っていう、しかも物をつくることの人間の数っていうのは違うから、僕は技術を精度良く残すっていうことも大事だけど、それと併せてやっぱり何人もの人間が物をつくるっていう状況を大事だと思うことから始まるのかなって思ってます。

田中：上原さんどうですか。何かありますか。

上原：本当に、結局需要がないと、必要なくなっちゃうんで。その需要をどうやって生み出すかってことだと思うんですね。貞山運河の話をちょっとしますけども、貞山運河もね、実はもうなんの役にも立たないものになってしまったんですね。けども、考えようによってはですね、あそこに人をどうやって呼び込むかっていう、そういうアイデアをつくれればですね、また人が来る可能性があるんですよ。だから、こういう和船も、和船の魅力をですね、どうやって発信するかとか、で、こんなのはもう世界中にないわけですからね、ここにしか。だから、それをうまく、発信の仕方とかですね、その活用の仕方をやっぱり考えるべきだと。

今回の震災なんかですね、まあ私はあんまり必要ないと思ったんですけども、防潮堤なんかは、できあがってみるとですね、すごくきれいなもんだなと思ってます。この前行ってそう思ったのは、あれをうまく活用すればね、むしろ、それしかないんじゃないかな。もうできちゃったものは、やっぱり使うべきだと。貞山運河の改修なんかも相当お金かけてやってるしね。けども、実際はですね、使うことまでは考えてないわけね。だからその視点がちょっとね。で、それは、まあいくら行政に働きかけてもなかなか動かないので、やっぱり市民運動とか市民団体がやって、それで「いいね」って言う人が増えればですね、いずれ行政も動いてくれると。だから、なんでもそうだけど、やっぱりいいものは残ると思うんですよ。だからそれを信じて、こういうものをなんとか継承していくって

というのが一番大事かなと思っています。

田中：ありがとうございました。そしたら、今いい時間になったので、最後に、途中で上原さんにも言っていただいたんですけど、宣伝というか、お知らせですね。チラシ一枚ちょっと持ってるんですけど、「今、貞山運河で」貞山運河フォーラムというフォーラムを明日ですね、1階のオープンスクエアで12時から16時半で開催されます。そこで、実際さぐばが来ますし、基調講演とパネルディスカッションが行われるそうです。で、明日も、この上映室はやっているの、こちら出入り自由なのでうまい具合に（笑）、両方来ていただくと大変うれしいです。それともう一つ、おまけなんですけど、明日たぶん見れるんですよ？ このマップみたいなのもね。貞山運河研究所さんがこういうものをつくっているそうで、明日見れるそうですし、まあ詳しくはあとで上原さんに聞いてみてください。あと、お知らせで、『さぐば』、DVDになっているって言ったんですけども、このDVDになっているのはなんと120分バージョン。だから今日見たものの倍以上ですね（笑）、あります。それで、今回すごいスマートでしたが、より細かい技術みたいなのはこれを見るとよくわかる、というものがありますので、これ2階の映像音響ライブラリーで配架してありますので、帰り、誰でも2階で見ることができますので、もしよければ見てみてください。それでは、午前中のプログラムはこれで終了させていただきます。お二人、本当にありがとうございました。